

## 河内重雄著『日本近・現代文学における知的障害者表象』

—— 私たちは人間をいかに語り得るか ——

木村 功

近年日本近代文学研究の領域で、障害者の言語表象に関する文学研究の成果が、次々に発表されるようになってきた。年一冊というわずかな一歩ではあるが、今迄殆ど顧みられることのなかった領域での、この「一歩」の意味は大きい。似たような問題意識を持つている者の一人として、荒井裕樹『障害と文学』（二〇一一、現代書館）に続く、本著の登場を喜ばしく思っている。

筆者によれば、「[idiot]」の翻訳語としての「白痴」は、近代教育制度の定着とともに、修学困難な児童という、意志や理性をもたない非人間的な存在を浮かび上がらせることで、実体性を帯びてきた言葉である。しかしここでは、白痴者を物語るための人間（健常者）／白痴者（知的障害者）という二項対立の図式が生まれることとなった。結果、意志をもたないとされた知的障害者は、座敷牢や精神病院に監禁・隔離され、社会的に疎外されたのである。筆者は国木田独歩「春の鳥」をはじめとする多くの文学作品を通覧することで、知的障害者が健常者以上に豊かな存在・人間として描かれていることに注目し、健常者によって一方的に物語られる知的障害者像

が、自らの意志や世界認識を語る知的障害者像へ変容したとする。また筆者は、「白痴」について語ることが、間接的に人間について語ることでありと考えており、文学の言説が教育や精神医学における「白痴」の問題を取り込みながらも、それら「白痴」言説に距離をとることで文学における「白痴」の言語表象が成立したと述べる。

このように筆者は言語表象における「白痴」像について、人間と知的障害者の概念における中心的な要素は何か、何であることが望ましいかという問題設定の下、人間の概念を構成する中心的な要素として意志・理性といった近代社会特有の語彙に、様々な言葉が相互に関係を作り出し、それがやがて近代的な思考や制度を生み出すというモデルを提出し、我々が議論や思考で運用する土台・枠組みを可視化し相対化することの必要性を説くのである。以下に述べる第六章にわたる考察では、筆者の所説が、作品発表時の同時代の言説を参照しながら、具体的に論述されている。

第一章「国木田独歩「春の鳥」論」では、六歳という知的障害者の形象に考察が加えられた。筆者によれば当時の科学・教育の領域

では、白痴者は教育による社会化が困難な、社会に害をなす非人間的な存在と見なされていた。「私」の語りは、そのような当時の言説を踏襲する一方で、六歳の言葉を翻訳しようとするが、「私」の試みが失敗したことで、翻訳可能な意志を持たない六歳は、「人間」としてはみなされなくなる。六歳のモデルは実際には死んでいないが、作品中で六歳の事故死が物語られたことには、当時の「白痴」をめぐる言説の反映が確認されるのである。

続く第二章「芥川龍之介「偷盗」論——「白痴」の女が母になることの意味」では、治安の観点から編成された大正時代の精神病患者をめぐる言説を参照することで、「偷盗」の登場人物の一人である白痴の女阿濃像を読み替えようとしている。研究史の中で「神聖な愚人」とされる阿濃は、作品中の階層の中で最底辺の存在であるが、白痴者という共通点から、作品発表当時の治安言説が「悪」と見なしていた白痴者を含む不良少女達の姿との照応関係が探られる。ここで筆者は、「悪」＝白痴と見なされる存在が母になることが人間化を意味しているので、白痴者を「悪」と見なす言説が無効化されると説く。また「白痴者」は「悪」の観念をもたぬが故に、「白痴者」が視点となる時、「白痴者」の存在や性を「悪」とする見方は無効化されることになるのである（六四頁）とする。この論に対しては、もともと「悪」を内面化していない者に、社会の側からの「悪」の意味付けが無効化されるという指摘が成立するのかわという疑問が提出されるだろう。無効化は、有効であることが前提となるからである。

第三章「石井充「白痴」論」は、大正末から昭和期の農本主義的農民の理想像として白痴者が描かれていると論じる。ここで筆者が

重視するのは、理性・意志を重視する近代教育のイデオロギーを批判する横井時敬ら農本主義者の言説である。知識偏重の近代教育を人間であると説く。小説「白痴」の主人公に筆者は、そのような農本主義的人間像を見出し、併せて白痴に関する言説が従来運用されていた医学・教育・政治の場ではなく、農業の場に位置づけられたことで、白痴者像が初期化され、新たな人間像たり得ることを本作の特徴として指摘した。それとともにドストエフスキー「白痴」のムイシキン公爵の影響も指摘して、日本における文学的「白痴」像の一例としている。筆者はまた、農本主義が描く社会像や生活に当時の白痴者が採るべき方向性を見出していた。

第四章の「山下清の語られ方」は、テレビドラマでもよく知られている知的障害者で「天才画家」と評される山下清が取り上げられた。筆者によれば昭和三〇年頃は知的障害者の作品や発言が、社会的・芸術的に価値があるものとして評価された時期であり、山下はその代表である。山下のプロデューサーとなった式場隆三郎（精神科医）は、山下の驚異的な記憶力とそれに支えられた絵画的才能をその著作『山下清放浪日記』（昭和三十一年、現代社）を通じて宣伝し、知的障害者の語られ方に大きな影響を与えることとなった。例えばはイデオ・サヴァンが備える機械的記憶力を、式場が「絵画的な記憶力」と語り直しているという指摘は興味深い。筆者はこの式場にゴッホ研究者の一面があり、式場と医学界との結びつきを明らかにすることで、「天才画家」像を生み出す上で大きな役割を果たした医学界を中心とする言説空間の編成と、式場死後のその解体ぶりを示して、説得力のある論考になっている。

この章の論考が重要なのは、一例を挙げればNHK大河ドラマ「平清盛」のタイトル題字を書いた書家の金澤翔子（一九八五）についても、ダウン症でありながら天才書家であるという語られ方が、認められるからである。障害者・病者という身体的ハンディを負っているにも関わらず、というような、称揚しながら差別化を内蔵させた物語形式が、相も変わらずメディアを通じて再生産され、障害者・病者像を強固に固定化している。山下清をめぐる言説の問題を論じた本論は、障害者・病者をめぐる物語批判や、その言説空間の編成に対する批判的視座を提示することに成功している。

第五章「大江健三郎『静かな生活』論」では、他の大江作品も参照されながら、周囲（父・娘）による「障害の受容」へのプロセスというモデルと、知的障害者自身による自己表象というモデルが二つ示され、知的障害者が意志を持つこと、言いかえれば自己表象の重要性が指摘された。一方で、障害者へ理解を示さない他者についても言及がある。

論中、周囲によって客体視されるイーヨー・周縁が、救済者としての自己表象を周囲に受け入れられることで、（社会の体系的秩序の内部に移動する）（一三〇頁）という指摘がある。障害者自らが救済者という自己表象をするにせよ、周囲がそれを認知するにせよ、それは障害者が所属するコミュニティに限定された象徴交換である以上、周縁性を覆すとまでいえるのだろうか。問題は、障害者の自己表象が身体的にも社会的にも限定されており、筆者が指摘する（健常者／知的障害者という二項対立の優位者は固定されていない）（二三四頁）ことを、社会の中で十分保持できないことにある。中心／周縁という、二項対立の枠組みを解体しようという手法は理

解できるが、障害者問題はさらにポストモダニズムが描く図式の外に出る必要があるだろう。また、筆者が作品世界から抽出して苦心して論じたモデルについて、万能・普遍的なものではないことを象徴する他者の存在を指摘するのは良いとして、父親のKも含まれるという論旨は、Kが関係者である以上、果たして成立するののか疑問が残った。

第六章「青来有一『石』論」は、知的障害者でサヴァン症候群による記憶と、キリシタン殉教と被爆にかかる集合的な記憶との関係が論じられた。筆者は、第五章まで人間や意志に注目して論じていたが、ここでは青来の「爆心」を貫く記憶の問題が焦点化され、記憶が語彙における言葉相互の関係の中心に据えられている点、健常者／知的障害者の二項対立が前提とされていない点の二つを「石」の特徴として挙げている。

ただ、虚構の知的障害者の虚構の記憶の特質がテーマになっていることには、議論の余地があるだろう。「石」には、筆者も指摘しているように、異性ととの恋愛と性、孤独と老いの問題も描かれている。筆者の関心は作品集を貫く記憶の表現方法の考察に向かったようだが、虚構の知的障害者の虚構の記憶の特質よりも、知的障害者を持った中年男性者が直面している社会的な問題を論じることも可能であっただろう。

手厳しい言辭を書き連ねたが、これも筆者の以後の研究活動に対する期待ゆえだとご理解いただきたい。各章には知的障害者をめぐる資料が多く組み込まれており、筆者の粘り強い地道な勉強ぶりが窺える。障害と人間をめぐるテーマを持つ研究者に、筆者が力強い道標を立ててくれたことは間違いない。関連して本書には、知的障

害に限定されているが、本書の半分を占める「知的障害に関する記述を含む作品・事項一覧」が収められている。対象は文学作品にとどまらず、教育学・社会学なども視野に入れ、それは海外の文献にまで及んでいる。明治から現代まで年度毎に整理された意欲的かつ野心的なリストである。内容も、知的障害に関わる法律の制定や、支援者・当事者による運動、事件、映画にまで及ぶ。本リストはデータベースとして、「人名・事項索引」と共に、九州大学出版会のウェブサイトで公開されている。障害者問題に関心のある読者のために入手の便がはかられており、裨益すること大である。

(九州大学出版会、二〇二二年三月二〇日、A5判上製、四一六頁、六九三〇円＋税)

(きむら たくみ)